

会議名	食料・農業協力講演会（第5回）「世界の食糧需給動向」
開催日時	平成18年10月19日（金）14：00－16：00
開催場所	中央合同庁舎2号館地下ホール（東京都千代田区霞ヶ関）
主催者	国際農林業協力・交流協会・国際食糧農業協会・農林水産政策研究所
参加人数	約200名（農水省・大学・団体・民間等）
1. 会議の概要（500-1000字程度または議事内容の資料添付）	<p>標記の会議に出席した。この講演会は上記の主催者が農産物貿易交渉、国際機関の活動及び農業分野の国際協力活動等について年間8回の予定で開催している講演会の一環である。</p> <p>今回は丸紅経済研究所長 柴田明夫氏によって「世界の食糧需給動向」と題して講演が行われた。</p> <p>〔要旨〕安い資源時代が終焉し、石油価格の高騰などから代替エネルギーとしてエタノールの生産が拡大し、一方これまでの人口8億人弱の先進国がエネルギー・鉱物資源を独占してきた時代は終わり、人口30億人の地域（BRICs＝ブラジル・ロシア・インド・中国）の工業化（地球規模の工業化）などで旺盛な資源・食糧需要の見られる時代を迎えている。このため、これら供給不安が強まるなか、エネルギー・資源価格はより高いレベルになり、エネルギーと食糧市場の連動性が強まってきている。</p> <p>豊富な図表により説明があったが、主要なところを簡条的に記述する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 世界経済の成長をBRICsが牽引し始めた。経済成長（GDP）は世界4.6、先進国2.4、BRICs6.7%。中でも中国が引っ張っていて9.7。BRICsは存在感を増してきている（この用語は米Goldman Sachs証券が2003年に発表したレポートで始めて使用し、ブラジル、ロシア、インド、中国を指す）。</li> <li>2. 中国の食糧消費パターンの変化：江・胡時代（90－）は市場経済が浸透し、主食消費量の減少、レトルト食品・外食・飲料消費の拡大、安全安心への関心の高まりなど欧風化。</li> <li>3. 中国は経済成長の仕組みを変えて来ている。すなわち海外から必要なものは輸入する。外貨を貯める、これで海外に打って出る。</li> <li>4. 2000年以降、石油の需給構造は180度転換、安い原油時代は終焉し、78ドル／バレルの高止まり。</li> <li>5. 世界の石油需要は急増、日量1000万バレル増加する期間が、77－95年では18年かかったが、95－03年では8年、03－07年では4年と短縮されている。</li> </ol>

6. 中でも中国の石油需要の増加が著しい。わが国を抜き世界2位のエネルギー消費国、90年代半ばに輸入国に転じ、2030年にはその80%海外からの輸入に依存、2000-2004年の4年間を見ても世界の石油需要の1/3を中国が占める。

7. 穀物は世界的在庫不足から小麦相場が急騰。中国のトウモロコシ生産は過去最高レベルだが、在庫逼迫で、純輸入国への転換に近い。ただ、世界の穀物需給はタイト化している。世界のトウモロコシ自給見通しでは、問題の中国は2006/07で見ると、期首在庫35（100万トン）、生産141、輸入0.1、需要141、うち飼料103、輸出4、期末在庫31。

8. 米穀物需給は、トウモロコシの生産は最高のレベルにあるが在庫・在庫率が半減している。

9. 世界の大豆需給の見通しも天候に左右されやすく不安定要因があり、価格も天候相場が続く。ブラジル・アルゼンチンの大豆生産は拡大する。

10. 小麦生産では豪州の小麦生産は過去最悪の干ばつ被害になり生産量のふれが大きい。世界の小麦の期末在庫率は歴史的な低水準へ。これは、ヨーロッパの生産減に加え、頼みのアルゼンチン、オーストラリアの干ばつが原因している。

11. トウモロコシのエタノール需要が伸びている。アメリカでは新エネルギー法（05・8）ができて、環境に配慮した国内でのエネルギー生産量の増加ということで、代替資源の開発、すなわちトウモロコシを原料とするエタノール生産に力を入れてきた。計画では2012年までにエタノール生産を現在の35億ガロンから75億ガロンにする。エタノール生産はアメリカ、ブラジル、中国、インドなどのシェアが大きい。アメリカの場合、トウモロコシ生産が増えるわけではなく、従って9割を国内で使い、1割を輸出という感じになり（現在生産277：単位100万トン、需要245、輸出57）価格は高騰せざるを得ない。

12. バイオマス燃料（太陽エネルギーを蓄えた生物体）→エタノールの原料としては、糖質系、デンプン系、セルロース系、油脂系、さらに廃棄物系バイオマスがあるが、それを取り出すためのインプットとアウトプットの関係が大切である。トウモロコシが有力視されている所以。なお、世界主要国でのバイオ燃料の普及・導入の状況の説明もあったが、日本は遅れている。

13. 中国の穀物貿易、大豆・小麦は輸入、トウモロコシもエタノール需要が高くなってきていて輸入になる可能性が高い。このところトウモロコシの期末在庫が急速に減少している。

14. 中国は1958-61年に大躍進運動飢饉があり、人口が減じた。そのご順調に増加し、いま13億人時代、食糧生産、需給は絶対の条件で、需給につとめるはず、つまり需要は増加する。一方エネルギー不足はバイオエタノールで補充する。年100万トン。計画では2010年までに500万トン、エタノールガソリンがガソリン全体に占める割合を50%にする計画がある。

15. かくて世界レベルで見ると現在の穀物の年度期末在庫率は15.7%で1970年代初めに酷似する低水準になっている。

16. なお、世界の食糧供給は小麦、米、トウモロコシ、ポテト、大豆などで食

	<p>糧生産の過半を占めるという点で、作物の多様性という面で極めて脆弱な供給構造になっていることも重要な側面である。</p> <p>17. 一方、異常気象・地球環境変化でリスクのグローバル化という変動要因もある。</p>
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<p>畜産分野に直接関わることはないが、この食糧需給の動向からすると、輸入飼料の逼迫、高騰が予測されるので、わが国畜産の飼料自給率をいかに向上させるか、長期的展望に立って、戦略的に研究を進める必要を感じる。さしずめ、飼料イネの効率的な生産技術などがその一つとなると考える。</p>
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<p>わが国のバイオマスの転換に関わる研究、計画が遅れているように思われるので、これらの推進も必要のように思われる。畜産分野からいえば、嘗て研究が行われたことのあるソルガムのバイオマス転換技術などが考えられる。</p>
4. 今後研究開発課題選択に当たって参考すべき事項等	<p>地球環境変化の飼料、畜産物生産への関わりへの予測</p>
5. 会議の所感	<p>新興国（BRICs）の工業的な躍進、特に中国の著しい経済成長が、世界の食糧ならびにエネルギー等資源の需給に大きな影響力を持ってきていることを具体的な数字を連ねてリアルに紹介された。また、バイオマス変換を通して、食糧とエネルギーを一体的にとらえる必要があることをしめしたことが印象的であった。食糧・エネルギーはこのような需要の拡大によって厳しい局面が予想される反面、土地資源の限界、地球環境変化による不安定要因などによってそれが一層厳しくなる印象をもった。直接的に畜産に関わる言及はなかったが、わが国畜産に与える影響も少なくないと考えられる。したがって、畜産分野としてもこれに関わる検討をしておく必要があると考えられる。</p>
報告者	<p>太田 顯</p>